

季刊

じぱ

Japan Intellectual Property Association

理事's eye

和泉 恭子

日本知的財産協会 副理事長／
富士通株式会社
知財グローバルヘッドオフィス長

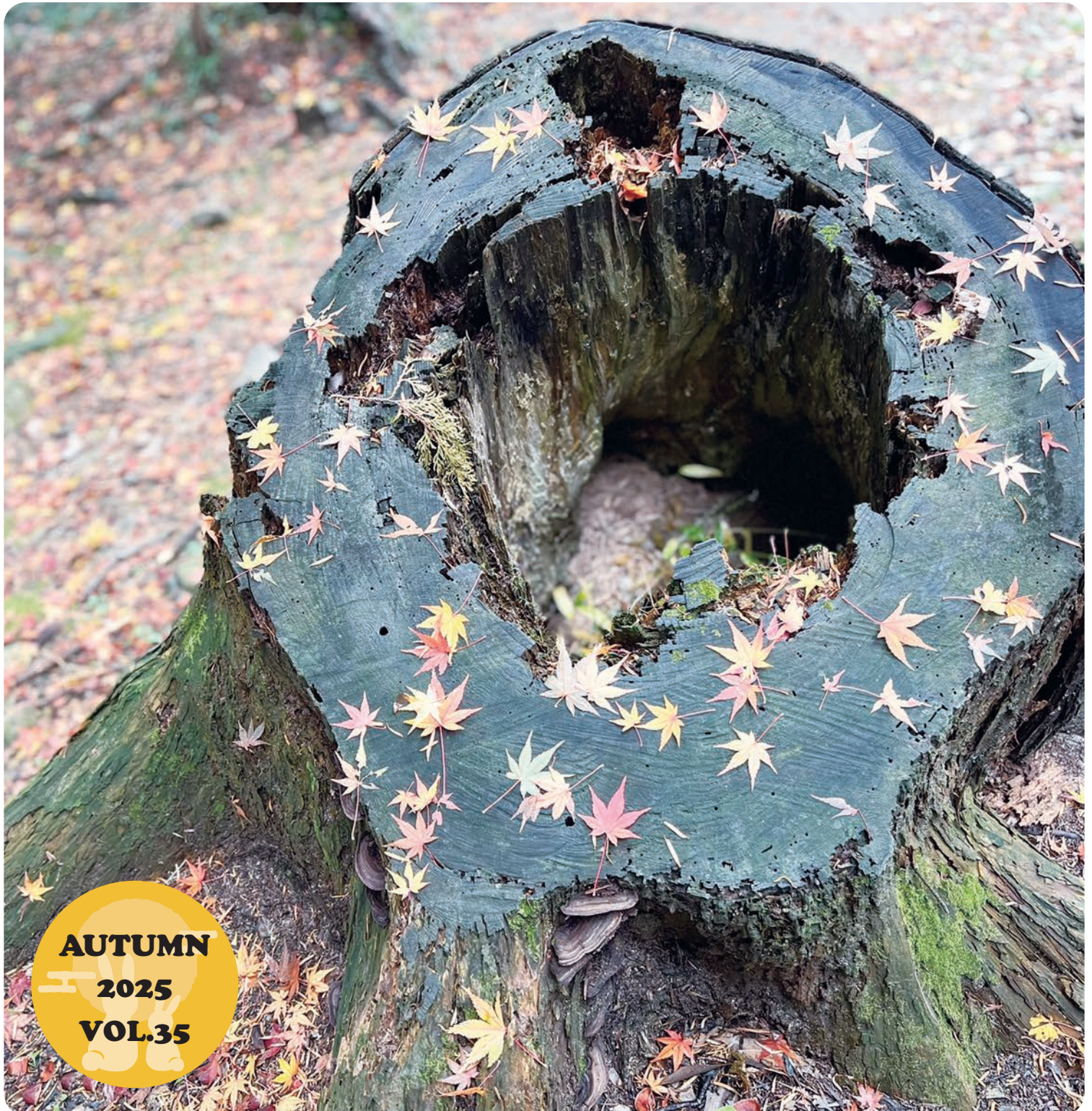
わが社のこだわり

株式会社ブリヂストン

モータースポーツは、「走る実験室」
“Passion to Turn the World”

ZOOM UP

会誌広報委員会



AUTUMN
2025
VOL.35

「晩秋の頃」 photo by 富田 千晶 氏

JIPAの「多様な力」が拓く知財の未来

私は2021年度より常務理事、2024年度より副理事長を拝命し、この数年間、DE&I Society WG、有識者連携WG、会誌広報委員会を担当し、JIPAの役割の広がりや深さを日々実感しています。

JIPAの大きな強みは、「多様な力」とそこから生まれる相乗効果です。会員企業は年々増加し、業種、規模、活動参加者の年代や経歴も非常に多様です。知財という共通の旗印のもと、こうした幅広い背景を持つ会員の皆様が、委員会活動や各種研修などを通じて、知見や経験を共有し、人脈を形成し、互いに刺激し合う場を提供していることが、JIPAならではの価値を生み出しています。このような卓越した「繋がり」の中で行われる議論や協働は、所属企業内では得られない貴重

な財産です。私自身もJIPAの活動を通じて、多くの知財実務家や専門家との交流から、新たな視点や気づきを得ることができました。これらは、個人の成長はもちろん、各会員企業が抱える知財戦略や実務課題解決への具体的な示唆となり、時には新たなビジネスの芽のきっかけとなり、ひいては企業価値向上に貢献していると考えます。

JIPAの「繋がり」は、会員間の交流にとどまりません。JIPAは政策提言や意見発信を通じて日本の知財業界をリードする役割も担っています。その一例として、私もJIPA理事として、昨年度は経済産業省『産業データサブワーキンググループ』に、今年7月には『WIPO-JIPA インダストリーラウンドテーブル』に参加し、国内

外で意見を発信する機会をいただきました。また、知財に関する最新情報や動向のタイムリーな発信や、質の高い調査研究結果の発信も重要な役割です。AIなど急速な技術進化は知財業界に大きな影響を与えていますが、JIPAは、これらの変化を的確に捉え、具体的な提言や情報発信を行うことで、日本の知財活動全体の底上げを図っています。

JIPAが、知財専門家としての個人の成長に資するとともに、多様化する会員のニーズに応え、会員企業の価値向上に結びつき、日本の知財業界の未来を切り拓くプラットフォームとなるよう、引き続き尽力してまいります。



「JIPA理事としての視点」 「知財部門のリーダーとしての視点」 2つの視点で深掘りする知財業界の今

和泉 恭子
Kyoko IZUMI

日本知的財産協会 副理事長
富士通株式会社 知財グローバルヘッドオフィス長

生成AIと共創で進化する知財

富士通はネットポジティブの実現を目指すテクノロジーカンパニーとして、社会課題の解決に取り組んでいます。知財部門は、富士通グループが持つ「知的資本」を価値に転換し、その核である「IP(知的財産)」を通じたイノベーションと新たな価値創造への貢献と、価値毀損リスクの低減に取り組んでいます。IPは技術保護にとどまらず、事業を創出し価値を生み出す戦略的資産です。知財部門は、技術・事業戦略と連携しながら、ビジネス成長を支える戦略的パートナーとして、その役割を大きく進化させています。

富士通では、高付加価値なデジタルサービス創出に不可欠な独自IPの確保を推進しています。AIや量子技術などの先端領域では、標準化やライセンスによる社

会実装や共創を視野に入れたIPポートフォリオ構築・活用を進めています。デジタル化が進みデータの価値が飛躍的に高まる中、AIコア技術を他技術や業種・用途の知見と融合したAI応用技術は、価値創造を加速する重要な要素であり、富士通では、Fujitsu Uvance 事業戦略に連動し、このAI応用技術のIP化に注力しています。

生成AI技術の進展は、知財活動にも大きな変革をもたらしています。特許調査や文書作成の効率化に加え、アイデア創出支援やポートフォリオ分析など、活用領域は拡大しています。法務・知財・内部統制部門のDXリーダーも務める私は、生成AIが知財業務の生産性を高め、知財パーソンがより戦略的で創造的な仕事

に集中できる環境を生み出すと期待しています。

この変革を効果的に加速させるには、AIの特性を理解し、適切に判断・活用できる人材育成が必要です。また、AI進化が加速する中、知財パーソンに求められる力は、戦略立案や共創をリードする高度な人間力へとシフトしていると考えます。富士通知財部門では、AIリテラシーと高度な知財スキルを備えた人材育成に取り組んでいます。

知財部門が企業価値向上に貢献し続けるためには、人材の力を引き出す組織づくりが重要です。生成AI時代、知財部門の力を引き出す挑戦を続けていきます。

わが社のこだわり [株式会社ブリヂストン]

モータースポーツは、「走る実験室」
“Passion to Turn the World”

荒木 充 Mitsuru ARAKI

株式会社ブリヂストン 知的財産部門 部門長

BRIDGESTONE
Solutions for your journey

1931年の創業以来、タイヤを軸に常に日本のモビリティ業界を牽引し、一人ひとりの生活と、社会の発展にブリヂストンは貢献してきました。変わりゆく社会に対応し、それぞれの時代において、安心・安全な移動や暮らしを支えています。「2050年 サステナブルなソリューションカンパニーとして、社会価値・顧客価値を持続的に提供している会社へ」をビジョンとして掲げ、ゴムのように強靱でしなやかに変化をチャンスに変えるレジリエントな“エクセレント”ブリヂストンへの変革を目指しています。企業理念「最高の品質で社会に貢献」の下、事業を通して社会に貢献する。そのための挑戦や努力は惜しまない。現在のサステナビリティにも通じる考え方は、常にすべてのブリヂストンの事業の礎となっています。

モータースポーツへのこだわり

ブリヂストンは、モータースポーツ(以下、MS)活動60周年を迎えた2023年を契機に、サステナブルなグローバルMS活動を強化しています。当社にとってMSはタイヤメーカーとしての原点であり、極限への挑戦です。

サステナビリティを中核に据え、極限への挑戦とイノベーションの加速、さらに、仲間と共にカーボンニュートラルなモビリティ社会を支えていくという情熱を込めた新メッセージ“Passion to Turn the World”の下、自ら極限へ挑戦する姿を示し、信頼・共感を醸成することで「サステナブルなプレミアムブランド」を構築していきます。



MS活動を「走る実験室」として、“From Circuit to Street”をコンセプトに、極限への挑戦で磨かれた技術を4輪・2輪市販タイヤ開発の次のステージへ繋げていきます。原材料調達からリサイクルまで、タイヤを「創る」「使う」、原材料に「戻す」というバリューチェーン全体のサステナ

ブル化をMSにもいち早く推進し、会社全体へ波及させていきます。

知財総合力とモータースポーツ

先端技術を生み出すR&Dは言うまでもなく、当社のバリューチェーン全体に存在する多様な知財がMSを支えています。創業以来90年以上にわたって築いてきた「接地を極める」「ゴムを極める」「モノづくりを極める」の3つの「極める」に代表される秘伝のタレともいえるコア知財を基盤に、タイヤに起こる現象の解析法・設計法でのナレッジや、生産物流のサプライチェーンにおけるノウハウの蓄積、リサイクル技術での総合力がMSに結実しています。これらのコア知財と、それを価値に変換する知財、バリューチェーン全域にあるナレッジ・ノウハウ・特許／意匠・商標を組み合わせ、事業や社会価値に変換していく考え方が当社の知財ミックスコンセプトです。また、MS活動を通じて多くの秘伝のタレが生み出されています。外部機関調査による、ゴム業界特許牽制力の高評価を得た理由の一つに、20年以上前のFormula 1®参戦時に依頼した超先進的なレース用ゴム配合の特許が効いていることがわかりました。EV車両用タイヤ等、現在も広く必要とさ

れるこの技術も、当時のMS活動で開発されたものです。知財担当として、極限の世界、「走る実験室」であるMS活動が会社の進化を加速させることを実感しています。

JIPAへの感謝と期待

JIPA参加を通じ、知財で産業の発展に貢献する志を同じくした様々な業界の方々と共に考える貴重な経験から多くを学び、多々刺激を受けています。JIPAでの業種を超えた繋がりは、私たちブリヂストン知財部門の秘伝のタレの継ぎ足し・発展に繋がっており、サステナブルな社会に向けても、益々重要になってくると思います。





「知財管理」誌10月特集号「多様なプレーヤーで盛り上げる地方創生」

「知財管理」誌10月号では、地方創生の取り組みと知財の関わりについて、今後の展望を多角的に考察しています。地域の産業構造や技術革新、各種施策等を踏まえ、日本における地方創生の将来像を考える契機となることを目指しました。産学官民それぞれの取り組みを論じた記事を通じ、多様なアプローチや知見を紹介しています。今回はインタビュー企画にも力を入れ、3稿を掲載していますので、以下に概略をご紹介します。

杉村 太蔵 氏
株式会社ここはれて 代表取締役社長
杉村太蔵氏の視点を通じて考える
今後の地方創生について

企画タイトルをご覧になって興味を持たれた読者も少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。今回、元衆議院議員で、現在はタレントとして多くの番組に出演されている杉村太蔵氏本人へのインタビューを実施しました。

杉村氏は、実業家としての顔もお持ちで、「新規創業支援を中心とした商店街活性化事業に取り組む」を掲げて「株式会社ここはれて」を設立し、地方創生のために尽力されています。

本企画では、杉村氏が地方創生に取り組むに至った経緯や現在の取り組みの具体的な内容にも触れつつ、杉村氏の目から見た地方創生の活性化に向けて必要なことを語っていただきました。また、新規創業を志す方々にとっての知財に対するイメージについて生の声をお聞かせいただきました。

濱田 健吾 氏
株式会社アクボニ 代表取締役
アクアポニックスが目指す、持続
可能な循環型社会

アクアポニックスは、魚の養殖と植物の栽培を組み合わせた循環型農業として近年注目されており、地方創生の観点からも期待されています。インタビューでは、神奈川県藤沢市にある同社の農場を見学し、濱田氏から直接、設備や取り組みについて詳しくご説明いただきました。テクノロジーを駆使してDX化を進める新しい農業のスタイル、無いものは自分たちで作ってしまう技術開発力、バイオニア企業ならではの知財戦略も興味深かったです。地方創生への貢献や可能性はもちろんですが、バイオニア企業として新たな市場を開拓し、業界の発展に尽力する姿勢は、スタートアップ企業の歩みとも重なります。新しい事業を開拓しようと奮闘されている方にとっても、参考になる点があると思います。濱田氏が、「未利用の資源は宝の山」と目を輝かせて語った姿も印象的でした。

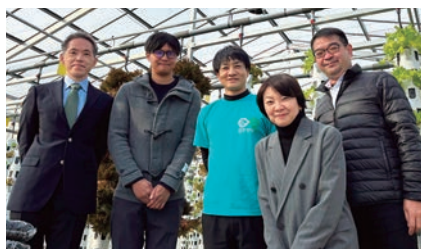
瀬田 元吾 氏
株式会社フットボールクラブ
水戸ホーリーホック 執行役員事業統括本部長
水戸ホーリーホックが挑む「地域密着」のその先

市民クラブとして30周年を迎えたJリーグクラブ「水戸ホーリーホック」執行役員事業統括本部長の瀬田元吾氏にインタビューを行いました。同クラブが、地域住民や行政、企業と連携しながら進めている独自の地域貢献活動や、知財を活用したブランディングの工夫、さらには再生可能エネルギーへの取り組みまで、多岐にわたる挑戦について熱く語っていただきました。「おらが街PRリーグ」や「ご当地ホーリーくん」といったユニークな施策を通じて、「地域の財産＝地財」としての価値を創出し続ける姿勢は、知財活動の新たな可能性を感じさせるものであり、地域とともに歩むクラブの姿勢に深い感銘を受けました。

本稿では、スポーツと知財、そして地方創生をつなぐ新たな視点を提示しています。



杉村氏(中央)



濱田氏(中央)



瀬田氏(左から2人目)

季刊じば Vol.35
AUTUMN 2025
2025年10月15日発行

編集人：一般社団法人 日本知的財産協会 会誌広報委員会
発行人：一般社団法人 日本知的財産協会内 上野 剛史
<https://www.jipa.or.jp/kikansi/jipa.html>
印刷&DTP：NPC 日本印刷株式会社